
死んだ叔父さん

紅の玄人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだ叔父さん

【Nコード】

N0800I

【作者名】

紅の玄人

【あらすじ】

まず目を瞑って玄関の前にいるって考える。そして家の中の部屋をすべて回ったら外に出る。えっ？誰かに会ったって？

(前書き)

何年か前にテレビでやっていたのを、おぼろげながら思い出して書いてみました。少しでも楽しんでいただけたらと思います。

「ねえ、由美は幽霊って信じる？」

「なにそれえ……信じてないけど、怖い話ならやめてね」

友人の美和が唐突に不可思議なことを訊ねてきた。怖い話が大嫌いな私は、美和の話の切り出し方にその類の雰囲気を感じ取り、とりあえず釘を刺した。が、美和はとりあえず聞いてよーと言って話を続けた。

「信じないってことは美和は幽霊見たことないってことだね？」

「あ、当たり前じゃん。靈感なんてないもん」

「そう！ 靈感！」

急に大きな声を出す美和。思わずびくつと体を震わせる私だったが、美和は構わず話を続ける。今度は神妙な、妙に静かな声で。

「靈感のない人にも幽霊の存在を知ることができる方法があるんだけどね……とりあえず目を瞑って」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 私幽霊の存在なんて知りたくないからそんなのやらないよ！」

「えー、大丈夫だよ。由美は怖がりだなあ。じゃあ知る方法だけでも聞いてよ。まずね、目え瞑ってえ……」

家に帰った私は一人部屋で音楽を聴きながら、自分の時間を過ごしていた。しかし、ふと美和に聞いた話が脳裏に浮かんてしまう。人間の脳は色々な感情を記憶しているが、その中でも最も忘れず鮮明に記憶するのが恐怖という感情だ。

由美は、まさに今美和の話を思い返してしまっていた。そしてさらに不思議なことに怖いものに対して、個人差はあるが人間はつい好奇心を抱いてしまい、その結果後悔するという愚かな風にできている。怖い話が大嫌いな由美も例外ではない。

ええと、確か美和が言ってたやり方は……

『まずね、目を瞑って自分の家の玄関の外に立つて考えるの。次にね、中に入って、部屋を一階から二階、すべて見て回るの。トイレやお風呂もね。全部見て回ったらまた玄関の外に出て終わり』

私はやってみた。

だけど、肝心なことを聞いてないことに気が付いた。

美和は結果については何も言っていなかった。気になった私は早速美和にメールを送る。

『やってみたよ……』

すぐに返信は返ってきた。

『部屋を回ってて家の中には誰かいた？』

私は思い返してみた。確かリビングを出て、階段を上ろうとしたら……お母さんがいたな。

『お母さんがいた』

今度は少しの間、五分くらい経ってから携帯が鳴った。

『家の中でとにかく誰かに会ったら、会った人数と同じ数の霊がいるんだって。でも気にしなくても大丈夫だよ！　だって私も会ったけど何も起こってないし。ワラ』

友達とはいえ美和に対して憤りのようなものを感じた。最後の方にフォロー的なことが書いてあるが、全然説得力がないというか、言い訳がましく感じた。一言、『大丈夫。信じないから』とだけ送って、携帯をベッドに放り投げた。

その日、私は夢を見た。

夢の中の私は家の中にいた。そして、階段の方へ足を向けた。リビングを出て階段を上ろうとした時だった……

「~~~~って……~~~~って……」

低くねっとりした呻くような声が耳に届き、夢の中の私は階段の前で足を止めて振り返って声の主を捜した。その声の主はすぐに見つかった。

私の足元、私の足に縋^{すが}り付くように、中年の男性が廊下を這っていた。

「くっついて……くっついてえ……」

「きゃあ！」

私は声を上げて起きた。汗を全身にびっしょりかいて、夢の内容を鮮明に覚えていた。私は落ち着くように、深く深呼吸して冷静にその夢について考えてみる。

夢の中の男の人がいた場所は偶然にも、いやもはや偶然という言葉は不適切かもしれない。男がいた場所は、昨日お母さんと会った場所と一致している。悪寒が背中を突き抜け、吐き気すらわき上がってきたが、あれ？　と思う。

あの男の人、見覚えがある。懐かしい記憶だ。
もしかして……

私は押入れを開けると、埃をかぶったアルバムを取り出す。ページをめくると、そこにはやはり夢の中にいた男の人が写る写真があった。まだ幼い私を肩車してにこやかに笑っていて、見る人を笑顔にしてくれるようなとても素敵な写真だった。

「叔父さん……」

その男性はお母さんの弟さんで、もうだいぶ前に亡くなった人だ。幼かった私をとつても可愛がつてくれた私が大好きだった人だ。

夢の中の叔父さんは、私に何を訴えていたのだろうか？ とても苦しそうに、何かお願いをするような、そんな感じだった気がする。

私はお母さんに夢の話をした。叔父さんが私に縋るように何かを求めていたことを聞かせると、お母さんは声を押し殺すように泣き出してしまった。

泣いているお母さんの背中をさすっていると、ややあつてお母さんは話し出した。

「叔父さんは……明彦はね、あなたに踊つてと言っているのよ」

それを聞いて私ははっとした。私は四歳の時から小学校六年生までバレエをやっていた。しかし足の骨格が崩れてしまい、踊れないようになってしまったため、バレエは志半ばでやめてしまった。お母さんが目元をハンカチで拭って言葉を紡ぐ。

「明彦はあなたが初めて公演する一か月前に交通事故に遭つて亡くなったの。あなたにバレエ用の靴をプレゼントした次の日にね」

思い出した……。叔父さんが私にバレエの靴をくれたこと。私の喜ぶ顔を見て、私以上にうれしそうな顔をしていた叔父さん。

『叔父ちゃんー、私、一生この靴宝物にするー』

『はっはっは、そうか。由美ちゃんの踊る姿早く見たいなあ』

叔父さんにもらった靴はもうない。ぼろぼろになって捨ててしまったんだ。

私はもう一度叔父さんに会つて、話をしたかった。幽霊でもなん

でもいいから、もう一度話したい。

願いは通じた。その日の夜、私は家の中にいる夢を見た。夢の中にも関わらず私はやるべきことはわかっていた。

リビングを出て、階段の前に行く……

「……って……って……」

昨日と同じように低くねっとりした、ほとんど聞き取れない声で呻いている。でも、今の私にははっきりと踊って、踊って聞こえていた。

私が言うべきことはわかっている。私はしゃがんで叔父さんと同じ目線でゆっくりと話した。

「叔父さん、あのね、私はもう踊れないの。足を悪くしちゃってね。バレリーナにはもうなれないの」

叔父さんは私の足を掴みながら黙って聞いている。

「叔父さんごめんね。踊るところを見せてあげられなくて本当にごめんなさい。叔父さんに貰った靴も今はもうないけど、本当に嬉しかったよ」

叔父さんは茫然とした表情で聞いていたが、私の足を引きながら、再び取り乱したように叫ぶ。

「おおって！ おおって！」

私は夢の中ながら泣き出してしまいそうだった。

「叔父さん、だから私は踊れないの」

それでも叫ぶ叔父さん。

「おおって！ おおって！ こおって！」

次第に叔父さんの叫ぶテンポが速くなる。それに伴って……叔父さんの不明瞭な叫びが……形を帯びてくる。

「おおって！ おおって！ おおって！ こおって！
こわって！ こわって！ こわって！ かわって！
かわって！ かわって！
代わって！ 代わって！」

えっ？ ……代わって？ 代わってって何？

私は混乱していた。しかし、視界に映ったものが私の混乱した脳を正気に戻してくれた。

叔父さんの足は、下半身は無数の手に引っ張られていた。ずるずると叔父さんはその力に負けて手の伸びている闇へと落ちようとしている。

代わってって……死ぬのを代わってこと？

そう考えた瞬間、私は反射的に叔父さんのことを引き剥がそうと、何度も何度も蹴った。

「いやあ！ いやあ！」

縫り付く叔父さんを無情にも、残酷とも思えるほど私は蹴って、

無理やり引き剥がした。私の足を離して、無数の手に引っ張られていく叔父さんの顔は恐怖に歪んでいて、最後に一言……

「由美ちゃん！ 代わってくれえー！」

目を覚ました私は、その日叔父さんのお墓参りに行った。

どうして叔父さんが私に代わってと頼んできたのかはわからない。何か恨みがあったのだろうか。あったとしたらなんなのだろうか。

私は叔父さんの墓前にあの、最高の写真を飾り、叔父さんの冥福をお祈りしてその場を後にした。

『叔父ちゃんー、私、一生この靴宝物にするー』
『はっはっは、そうか。由美ちゃんの踊る姿早く見たいなあ』

『由美ー、この靴ボロボロだから捨てるわよー』
『あ、うん。また新しいの買ってね。大事にするからさ』

「由美ちゃん……」

「代われ!!」

(後書き)

駄文に付き合っていたいただきありがとうございました。指摘等ありましたら書き込んでくれると大変嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0800i/>

死んだ叔父さん

2010年10月15日22時34分発行